

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

J.S.Millの価値論に関する一考察

著者	奥山 忠信
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	13
ページ	1-13
発行年	2013-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000309/



J.S.Millの価値論に関する一考察

A Consideration of J.S.Mill's Theory of Value

奥 山 忠 信

OKUYAMA, Tadanobu

J.S.ミルの価値論を貨幣数量説との関係で考察する。貨幣数量説は、貨幣の価値は需要と供給だけで決まり、貨幣に内在的な価値はないことを前提とする。J.S.ミルは、価値概念としては純粋な相対価値論を主張するが、価値概念とは別に価値の決定要因を重視し、自由競争財については生産費説を唱える。こうした重層的な価値論は、貨幣数量説との関係を複雑なものにする。J.S.ミルは、貨幣数量説を明確に支持し、同時に実質的には、貨幣数量説を無意味なものとしている。

序 言

本章の課題は、J.S.ミル (J.S.Mill, 1806-1873) の『経済学原理』(*Principles of Political Economy with Some of Their Applications to Social Philosophy*, 1848, Mill [1965]) における価値論を検討することにある。とはいえ、本稿の最終的な問題関心はミルの貨幣数量説にあり、本稿におけるミルの価値論の研究は、ミルの貨幣数量説と関わる限りでの考察とする。

貨幣数量説にとって価値論、特に貨幣価値論は理論形成のための前提となる。貨幣数量説はロック (John Locke, 1632-1704) やヒューム (David Hume, 1711-1776) がそうであったように、貨幣が絶対的な価値あるいは内在的で固有の価値を持つことを否定することによって成立する学説である。

貨幣数量説は、アメリカ大陸の発見以降、

中南米からの大量の金銀がヨーロッパに流入し、これに伴ってヨーロッパの価格が上昇したいわゆる16世紀の価格革命を契機に広まった理論である。貨幣の価値を購買力と考えれば、物価の上昇は貨幣価値の下落と同じことである。したがって、物価の上昇を説明するには貨幣の価値に関する定義が前提となる。

貨幣数量説が物価の上昇を貨幣量の増加に求める場合、時代背景として貨幣は金銀貨幣を指す。そして貨幣数量説は、金や銀の貨幣には、固有の価値がないとする価値論を採用するのである。ロックが貨幣数量説を展開する場合には、貨幣の価値は想像的 (imaginary) なものであったし、ヒュームにとっては犠牲的 (fictitious) なものであった (奥山 [2010b], [2011a])。いずれも、金や銀の貨幣の価値は、需給関係だけによって決まり、それ自身の固有の価値を持たないと考えた。市場価格が収斂する自然価格のような存在を持たないこと

キーワード : J.S.ミル、価値、貨幣数量説
Key words : J.S.Mill, value, quantity theory of money

が、貨幣数量説の前提となる貨幣価値論である。

本稿が考察対象とするミルは、価値の概念に関しては純粋な相対価値論の論者であり、この限りでは、貨幣数量説と共存できる。しかし、ミルは生産費説や労働価値論も否定してはいない。ミルにとっては価値の概念が純粋に交換上の関係概念であることと、価値が生産費や労働時間などの自然価格に収斂することとは両立することであった。この考え方と貨幣数量説を共存させるのは難しい。しかし、この問題は価値論における絶対的価値と相対的価値の問題であり、古典派価値論にとっては最大の問題の一つであった。

I 相対価値論の重層的な理解

ミルの価値論を理解するためには、ミルと同時期に相対価値論に立ち入った考察をしているサミュエル・ベイリー (Samuel Bailey, 1791-1870) の『価値の性質、尺度、原因に関する批判的論究』(*A Critical Dissertation on the Nature, Measure and Causes of Value*, 1825, Bailey [1967]) における価値論を見ておく必要がある。

ベイリーはリカード (David Ricard, 1771-1823) 価値論を全面的に否定する論者として、広く受け止められている。まずベイリーは価値の性質を論じ、そのなかで価値の概念を交換上の関係と規定する。価値は2つの商品の間の交換比率であり、通常の意味での交換価値である。この関係は商品と商品との交換にも、商品と金貨幣との交換にも当てはまる。

この価値の性質論から、ベイリーの価値尺度論が導かれる。価値が2商品の関係である以上、単一の商品は価値の概念には馴染まな

い。個々の商品はそれ自身の価値を持たないのである。

ベイリーにとって、Aという商品の価値は、AとBの交換関係、すなわち交換比率である。ここでC商品がB商品と交換関係を結べば、B商品を媒介にして、A商品とC商品の価値が比較可能となる。比較の媒介物として機能する商品が尺度財としての商品であり、通常は貨幣商品である金や銀がこの役割を果たす。貨幣があつてはじめてリングとミカンの価値が比較できるようになるのである。貨幣がなければリングとミカンの価値は比較できない。

以上が、ベイリーが経済学史上に異彩を放つ点であり、ベイリーの価値論がここで完結するならば、ベイリーは価値論を価格論に一元化した経済学者と言うことになる。しかし、ベイリーは価値（相対的価値）や価値尺度とは別の問題として、価値の原因論を論じる。この点はベイリーの価値論としては注目されていない。

ベイリーにとっての価値の原因は、交換に際して心に確実に作用する要因である。ここには、希少性や、生産費、労働などの複数の要因が入り込む。交換当事者はそれぞれに商品の価値の原因を考慮する。その結果として交換比率としての価値が決まる。したがって、価値と価値の原因は異なった概念であり、価値それ自身は原因ではなく、交換における交換当事者の価値の原因に対する評価の結果として生じる概念になる。しかも価値の原因に関する人間の評価が交換比率を決めるので、ベイリーの価値論は主観価値論である。価値は商品の要因そのものではなく、交換に際しての商品に対する人間の心の評価の結果と言うことになる。

実際の理論の展開においては、ベイリーは

価値の原因をおそらくは単位の取りやすさから労働時間と仮定して論を進めている。特に、競争によって需給関係が市場で自由に調整される商品については、価値の原因を生産費や労働時間とみている。

純粋な相対価値論の確立者であるベイリーは、価値原因論では複数原因説を取り、労働価値論の擁護者でもあったのである。ミルは、ベイリーと同じ相対価値論を取り、さらに需給論を価値論の中心に据える¹⁾。ミルの『経済学原理』(以下『原理』と略す)の価値論はベイリーと同様の内容を持っている。

ベイリーが批判したリカードは、経済学研究の初期の地金論争期には、貴金属貨幣に関しても紙幣に関しても、貨幣数量説を支持していた。しかし、この時期は労働価値論を確立してはいなかった。

しかし、リカードは労働価値論が確立した『経済学および課税の原理』(1817)では、貴金属貨幣についての貨幣数量説は述べていない(奥山 [2013])。貨幣数量説はそれ自身に価値を持たない紙幣に関する法則となっている。リカードの労働価値論は、投下労働を価値の原因であると同時に尺度でもあるとみなす。この見解では、金や銀の貨幣の価値も他の商品と同様に労働時間によって決まることになる。この見解と貨幣数量説とはそぐわない。

リカードは、貨幣数量説ではなく、その対極にある必要流通手段量説を採用する。必要流通手段量説は、貨幣の価値は労働時間や生産費によって決まり、また流通に入る商品価値の総額が貨幣の量を定める。そして貨幣量が必要量を越えた場合には、過剰な貨幣は流通の外に溢れ出る、と考える。

これはアダム・スミス(Adam Smith,

1723-1790)が、『国富論』(1776)において労働価値論を前提に唱えた理論である。スミスは、16世紀の価格革命は、金や銀の貨幣量の増加によるものではなく、中南米の豊度の高い鉱山から支配労働あるいは生産費の低下した金や銀がヨーロッパに流れ込むことによって生じた現象であると考ええる。

ミル以前の学説史においては、貨幣価値論と貨幣数量説とは以上のような関係にあった。ミルは、価値の概念としては純粋な相対価値論の立場を表明しつつ、ベイリーのように生産費説を容認する。その上で金や銀の貨幣についても紙幣についても貨幣数量説が正しいことを明言している。

以下、ミルの価値論と貨幣論との内容に立ち入ってみよう。

Ⅱ 『原理』における交換論の位置

ミルの価値論の位置づけは独特である。それは、第1篇生産論、第2篇分配論に続いて、第3篇交換論において展開される。ミルによれば、交換論を第3篇に置く理由は、経済学の主要テーマが生産論と分配論である。ミルにとって、生産論と分配論こそが、「経済学の2大分野」(Mill [1965], Vol.3, p.455, 訳17頁)なのであった。

そして、ミル自身の説明では、彼の『原理』が交換論を前提とすることなく、生産論と分配論を説くことができたこと自体が、この体系化あるいは偏別構成の正当性を保証する(*Ibid.*, 同前)、と言う。奇妙な言い回しであるが、ここには経済学の叙述の体系に関するミルの方法論が現れている。

すなわち、ミルは、叙述の体系は論理的な前後関係によって規制されると考えており、実際に生産論と分配論が交換論を前提とせず

に叙述できるということ自体が、交換論の前に、生産論と分配論が位置することの正当性を意味している、と考えるのである。

なぜ、2大部門は価値論を前提とせずに論じることができるのか。2大部門と呼ばれる部門のうちの生産論に関しては、ミルは次のように言う。

「そもそも富の生産に関する法則や条件は、物理的真理の性格（the character of physical truths）を持ち、そこには人間が任意に選択する余地はないのである。」（*Ibid.*, Vol.2, p.199, 訳第2分冊、13頁）

これに対し、分配論は生産論とは対照的な性格を持つ。分配論は、「もっぱら人為的制度上の問題である（human institution solely）。」（*Ibid.*, p.199, 同前, 14頁）すなわち、「富の分配は社会の法律と習慣に依存する（The distribution of wealth, therefore, depends on the laws and customs of society）。」（*Ibid.*, p.200, 同前15頁）

生産の自然的性格と分配の人為的性格に対して、交換は商品経済あるいは資本主義経済という限定された経済で成立する。この点で交換論は、生産論と分配論の後に位置するのである。

分配の制度は人為的であり、歴史的社会的に異なる。いつの時代でもどの社会でも、交換が分配の制度を担うというわけではない。このような方法で、ミルは商品経済も資本主義経済も歴史の中で相対化している。ミルの経済学の優れた分析視点と言える。あるいは、社会主義社会を将来に展望することで、交換経済はミルにとって歴史的に限定され、相対化されたシステムとして映っていたと言える。

そして、ミルは「価値の考察は分配論に関わるが、それは慣習（usage or custom）では

なく競争（competition）が分配の代行機関（distributing agency）となった場合に関してのことである」（*Ibid.*, Vol. 3, p.455, 訳第3分冊、18頁）、と言う。

生産物の持ち手の交換をとおした分配は、いつの時代でも多かれ少なかれ行われている。しかし、その多くは、慣習による持ち手の交換であり、これは人為的なシステムの問題であり、価値論の領域ではない。価値論が意味を持つのは、競争が一般化した経済システムにおいてのことである、とミルは主張している。市場のメカニズムの中で価値論が意味を持つのである。ここにミルは、価値の概念の特殊歴史的な性格を把握していたと言える。

さらに、ミルは交換論について、ミルの生きた時代においても、交換は生産物の分配に関する基本法則ではなく、「機械の一部である」（*Ibid.*, 同前）と言う。

今日においてさえ、現実には資本主義以外あるいは商品経済以外の経済関係は広汎に存在する。現実には資本主義や商品経済が経済の全てを覆ったことはない。ミルにとっては、こうした経済も研究の射程に入っていた。

この点は、ミルは方法論的にスミスやリカードとは大きく異なっている。スミスは、社会が資本家、地主、労働者の3大階級に編成される以前に、その萌芽的な姿を見ただけで、全体が3大階級となった社会を想定して『国富論』を書き上げた。リカードは現実に姿を現しつつある資本主義社会を対象としている。しかし、それは社会のすべてを覆っていない部分的な存在である。しかし、研究対象として想定された社会は両者とも3大階級の社会であった。

ヒュームが道を拓いたように、商品経済あるいは資本主義は、人間の本性にかなった経

済システムであり、これは最も自然な成り行きとして発展して行く。したがって、理論的解明は、現実には完全なたちでは存在せず、場合によっては、ごく一部にしか存在しない資本主義的な経済であっても、これを対象に想定して分析することに問題はないと考えていたのであろう。

ミルにとっては、価値論や貨幣論を含む交換論の法則は、経済にとって普遍的な法則ではなく、歴史的には一時的な問題(temporary accidents, *Ibid.*, p.456, 訳第3分冊、18頁)なのである。このことが、交換論が生産論と分配論の2大領域の後に置かれる理由である。そして、資本主義社会は、産業制度全体が売買に基礎を置いている社会であるがゆえに、価値の問題は重要である(the question of value is fundamental, *Ibid.*, p.456, 同前18-19頁)、と考える。

そして、ミルは価値論に関して次のように言う。

「幸運なことに、価値の法則に関して明らかにすべき問題は現在および将来の著述家に残されているものは何もない。この問題の理論は完璧である。」(*Ibid.*, p.456, 同前19頁)

価値論を応用する際の問題が残されているだけだ、というのである。確かにミルの需給説はスミスの市場価格と自然価格を受けたものである。そして、ミルはベイリーの名を出していないが、ミルの価値概念としての相対価値論、価値尺度論、価値原因論を区別して重層的に扱う点は、先に紹介したようにベイリーと基本的に同じである。

Ⅲ 価値の概念

ミルは、第1章の冒頭において、アダム・スミスのいわゆる水とダイヤモンド問題を批

判する。スミスは、水は有用であるにもかかわらずタダであり、ダイヤモンドは有用性がないのに高価であるという「水とダイヤモンド問題」を提起し、その違いを労働に求め、労働価値論を展開する。

これに対しミルは、労働生産物以外は対価を取りえないことを認めつつも、クインスイ(Thomas de Quincey, 1785-1859)を引き合いに出して次のように言う。

「経済学における、ある物の効用とは、その物がある欲望を満たし、あるいはある目的に役立つ、その能力のことである。ダイヤモンドはこの能力を高い程度において持っているものであって、もしそれがこれを持っていなかったなら、それはなんらの価格も持たないであろう。・・・ある物の交換価値はどれほどでもその使用価値以下になりうる。しかし、使用価値を越えうるように言うことは、一個の矛盾を含むものである。」(*Ibid.*, p.457, 同前20頁)

ダイヤモンドに効用はないというスミスを批判してダイヤモンドの効用を認める。そして使用価値(効用)を越えた交換価値(価格)で買うことはあるが、使用価値(効用)以下の価格で買うことはないと言う。欲しくもないものを高い値段で買う人はいないが、欲しいものを安い値段で買う人はいる、ということである。

効用による価値の決定を説いているわけではないが、効用は労働あるいは生産費とともに価値を決定する要因になっている。労働と効用の2元価値論という意味ではテュルゴーに近い(Turgot [1972a, b])。テュルゴーは、取得の困難と効用との2元価値論を取るが、ミルは生産費を基本に効用を生産費に対する制約要因として扱ったと言える(奥山[1990])

参照)。

ミルの趣旨は、生産費（交換価値）が高いものでも効用（使用価値）が認められなければ、生産費以下の価値でしか売れないということである。この点で、効用は、何らかの基準で生産費と比較可能となっている。双方に共通する単位はないが、おそらくはベイリーが、希少性と労働などの複数原因を人間が交換において主観的に評価することができると考えていたのと同様の意図があったものと思われる。

ミルの価値論は、第6章「価値論の要約」にまとめられている。基本的な点は以下のとおりである。

- ① 価値は相対的な言葉である。ある商品の価値は、その商品が交換される他の商品、あるいは商品一般の数量を言う。
- ② 商品の一時的な価値、または市場価値は、需要と供給に依存し、需要が増えれば騰貴し、供給が増えれば下落する。しかし、需要は価値とともに変化し、商品が安価になれば高価な時よりも一般には大きくなる。そして価値は、いつも需要が供給に等しくなるように自らを調整する。
- ③ 市場価値は変動の後に自然価値に復帰する。商品は平均すれば自然価値をもって交換される。
- ④ 商品によっては希少性が自然価値となる物もあるが、多くの商品は、自然的価値あるいは費用価値・生産費によって交換される。

②の点で、ミルは、価格と需要量との関係を右下がりの需要曲線で考え、需要量そのものの変化を需要曲線のシフトで考えていたと思われる。供給曲線については、供給量の増

加による価格の下落は明記しているが、価格の下落による供給量の減少は明記していない。生産は技術的な要素によって決まるという見解からは、生産係数は固定されており、一定の期間を考慮して、ミルの供給曲線は水平だった可能性がある。

ミルの価値論としての需給論は、古典派の市場価値と自然価値の関係を前提にしたものである。

「あらゆる物の価値は一定の中位的な点（『自然価値』と呼ばれるところの）に向かって引き寄せられている。またこれも既に見たところであるが、実際の価値あるいは市場価値は、数年の平均をとった時に初めてこの自然価値に一致し、あるいはほとんど一致する。それは、需要における変化により、あるいは供給の偶然的変動によって、絶えずあるいはこれ以上となりあるいはこれ以下となる。しかしながらこのような変動は商品の供給が備えところのその商品の自然価値においてこの商品に対し存在する需要に順応しようとする傾向を通して、それ自身を是正するものである。」(Ibid., p.570, 同前231-232頁)

なお、ミルは商品を3分類し、供給が制限されている独占的商品、需要に対して供給が対応する一般商品（自由競争財）、土地の制約から最劣等地の生産費が価値を規制する穀物のような商品を区別し、それぞれについて価値の決定論を論じる。この商品3分類は、叙述の順序の違いはあるが、ベイリーと同様である。

ただし、ミルにあっては、需給論は3つの商品分類の全てに共通する一般的な原則となる。この意味で需給論が価値論の一般法則と考えられている。需給論を価値論の一般法則と位置づけた点が、ミルの価値論の大きな特

徴である(馬渡[1997a, b])。なお、ミルにあっては、生産費は賃金と利潤からなり、地代は基本的には入らない。

Ⅳ 相対価値と価値尺度と価値の決定要因

価値あるいは価値の尺度と価値の原因との違いは、ミルにとっても重要な意味を持つ。第15章において、ミルは「価値の尺度の概念を価値の規定者あるいはその決定原理の概念と混同してはならない」(Mill, *op.cit.*, p.580, 同前251頁)、と言う。

この問題は、長期にわたっての経済学の係争問題であった不変尺度論争を踏まえたものである。価値尺度財としての貨幣の価値はそれ自体変動し、経済を混乱させる。金や銀の価値の変化は、物価の変動を意味するのでそれ自身も大きな問題であるが、金銀複本位制の時代には、金銀の流出問題を引き起こしていた。経済学にとっては、理論的な関心事であると同時に、現実的にも看過できない問題であった。

そのため、経済学は長さや重さのように、時と場所を越えた不変の尺度を求めているのである。この課題が古典派を内在的価値の探求に導き、労働価値論や自然価格論、あるいは生産費説へと導く。不変尺度論争に導かれて古典派価値論が進展したと言っても過言ではない。

スミスは、不変尺度の探求から労働価値論に到達している。リカードウもまた、より不変な尺度を求めて、スミスの価値論を投下労働と支配労働の二元的な混乱した価値論とみなし、価値の原因と尺度を共に投下労働とする投下労働価値説に達している。不変尺度論争は、現在では忘れられた論争であり、振り返られることもないが、この論争が価値論論

争に与えた影響は大きい。

ミルは、経済学者が求めていた不変の価値尺度は、生産費の尺度であると言う。

「この生産費の尺度こそ経済学者たちが価値の尺度の名のもとに普通意味してきたところのものである」(*Ibid.*, p.579, 同前248-249頁)。

生産費は価格で表示されるが、ミルは生産費で意味するものは労働時間に還元できるものであるとみなす。この点ではリカードウと同様である。労働のような絶対的なものを価値と考えて、その尺度を生産費の尺度と呼んでいる。

スミスは、不変尺度を労働に求めた。しかしその内容はミルには受け入れられないものを含んでいた。ミルは次のように言う。

「一方、価値の尺度としての労働については、アダム・スミスは一貫していない。彼は、ある時は労働の価値(すなわち賃金)は、世代から世代への間の変動は激しいが、年々の変動は激しくないと言い、労働が短期には尺度であると言う。また、他方、労働は本質的にもっともふさわしい価値の尺度であるかのように言う。その理由は、一人の人間の一日の肉体労働は、彼にとっての同量の努力と犠牲としていつも観察できるからである。しかし、この命題が妥当かどうかは別として、全く別の考えを代用して交換価値の概念を捨てるものである。これはむしろ使用価値に類比したほうがいいようなものである。」(*Ibid.*, p.580, 同前249-250頁)

ミルはスミスが労働を価値尺度であると言う時、それは2つの意味に用いられていると解釈する。賃金と投下労働である。マルクスの用語を用いてミルのスミス批判を解釈すれば、賃金は労働そのものではなく、労働する

ことのできる能力すなわち労働力に対する対価である。投下労働は、労働力の支出であり、これが労働時間で測られる。両者は全く異なった概念である。

ミルは労働時間を尺度とすることは、交換価値概念の放棄であるというのである。交換価値は商品の交換関係であるのに対し、生産費あるいは労働時間は絶対的価値あるいは絶対的価値の尺度だからである。交換価値を意味する価値概念にはこれらは馴染まないのである。ミルはスミスの労働尺度論の二面性を明確にとらえ、絶対的価値の概念を否定したのである。

また、リカードウを批判して、次のように言う。

「リカードウやその他の人たちが、ある商品の価値は労働の量によって規定されるという場合、彼らが言っているのは、その商品が交換されるところの労働の量ではなくて、その商品を生産するのに必要とされる労働の量のことである。彼らは、これが価値を決定すると断言している。これこそが価値であり、他の物は価値ではないと言っているのである。しかし、アダム・スミスやマルサスが、労働が価値の尺度であると言っている場合、彼らが言っているのは、その商品が作られたあるいは作られうる労働のことではなく、その商品を持って交換されまたは購買できる労働の量のことである。言葉を変えて言えば、労働を持って評価したその商品の価値のことである。」(Ibid., pp.580-581, 同前251-253頁)

ミルのリカードウ批判は、価値を投下労働に求めた点にある。これは明らかにスミス(Smith [1998])やマルサス(Malthus [2012])とは異なる。スミスやマルサスが価値の尺度と言っているのは、交換において他の商品の

労働をどれだけ購買（支配）するかであって、自分の商品の生産にどれだけの労働が投下されるのかではない、と言うのである。

リカードウの主著『経済学および課税の原理』は次のように言う。

「もしも商品に実現された労働量がその交換価値を左右するものであるとすれば、労働のあらゆる増加は、労働が投下された当の商品の価値を増加させ、同様にあらゆる減少はそれを引き下げるに違いない。」(Ricardo [1951a], pp.13-14, 訳16頁)

この引用で明らかなように、リカードウは投下労働という絶対的価値を前提に価値論を組み立てている。そしてリカードウはスミスを次のように批判する。

「このように正確に交換価値の根源を定義し、そしてすべての物はその生産に投下された労働の多少に比例して価値が大となり小となることを首尾一貫して主張すべきであったアダム・スミスは、自ら別の価値の尺度標準を立てて、この尺度標準の多量または少量と交換されるに比例して物の価値が大となり小となる、と論じている。」(Ibid., p.14, 同前17頁)

リカードウは価値の原因と尺度を区別することはなく、価値の原因がそのまま尺度となるとみなし、尺度を投下労働に求めていたのである。したがって、リカードウには、スミスは混乱していると見え、支配労働を捨てて、投下労働で一貫すべきだ、と批判した。これに対しミルは、相対価値や価値尺度の概念と価値の原因を区別して重層的に把握していたために、尺度論としては、投下労働は通用せず、支配労働が妥当であると考えたのである。ミルとリカードウの価値概念の相違がスミスに対する評価の違いとなって現れているので

ある。ミルにとっては、労働者の受け取る賃金は、生産費の主要部分として価値の決定原理に参加することになる。

ミルは需給論を価格決定の一般理論として位置づけると同時に、一般的な商品である自由競争財に関しては生産費が価格を規制することを説く。ミルの需給論をもって古典派の労働価値論や生産費説から離れる過渡期の価値論とすることもできれば、生産費説を基本命題として明確に維持している点で、古典派の正統な後継者と考えることもできる。

実際には、ミルの価値論は、構造的にはスミスの自然価格と市場価格の枠内に収まっていると考えることができる。本論で見ると、ミルは需要と供給を価格決定の一般的な原理として強調しているが、その収斂する点に生産費（労働）を置いている。後段の点では、スミスの正統な継承者である。

また、ミルは商品を3分類し、供給が制限されている独占的商品、需要に対して供給が対応する一般商品（自由競争財）、土地の制約から最劣等地の生産費が価値を規制する穀物のような商品を区別し、それぞれについて価値の決定論を論じる。これは、ベイリーが論じたことでもあり、見方を変えれば、リカードウも商品分類に関しては、同様と言える。リカードウが独占価格を取る商品を価値論の考察対象外とし、需要に対して供給が対応可能な一般財（自由競争財）と穀物のような最劣等地の価格が全体の価格を規制するような商品を考察対象としたことを受けている。

独占商品は、需要と供給によってのみ価格が決定され、一般的な商品は、需要と供給による価格の決定の中心点としての生産費があることを説く。このことは貨幣の価値を論じた第8章と第9章の構成に表現されている。

すなわち第8章の表題は「需要と供給によって決定されるものとしての貨幣の価値について」と付され、第9章は「生産費によって決定されるものとしての貨幣の価値について」とされている。需給によって決まる市場価格とその中心点としての生産費の関係が貨幣の価値の決定論にも反映しているのである。

付言すれば、金銀の価値は、一般商品と同じように生産費によって決定されることになるが、理論的には金銀が地代を伴う鉱山から算出されるので、最劣等地の生産費によって規制される。しかし、ミルは説明の便宜上、金銀および貨幣としての金銀の価値は一般商品と同じものとして説く。こうした扱いはリカードウと同じである。

以上、ミルの価値論は、相対価値論を全面に出し、需要と供給の法則を価値論の一般法則とした点では、リカードウに代表される古典派の価値論から離れるものであったが、価値概念論や尺度論とは別に、価値の原因を持ち、その中で、一般的な自由競争財に関しては、生産費を価値の決定要因として重視している。金銀の価値も最劣等鉱山の生産費に規制されるという修正は伴うが、便宜的には一般商品として扱って理論的に考察することも許容されている。すなわち、金銀貨幣に関しても、生産費が重要な役割を演じている。

結 語

貨幣数量説は、多くの教科書で、古典派の基本的な理論として扱われている。しかし、貨幣数量説にとっては、貨幣の価値が内在的価値を持たないことが前提となる。そして、古典派は労働や生産費のような内在的な価値を主張する。古典派と貨幣数量説の関係は、現在では見直されつつある（佐藤有史

[2003])。

私見では、スミスは積極的な貨幣数量説批判の論者であり（奥山 [2011b]）、リカードウは地金論争期には、金銀貨幣と紙幣の双方に関する貨幣数量説の論者であったが、『経済学および課税の原理』では、紙幣に関しては貨幣数量説を積極的に主張しているが、金や銀の貨幣に関しては貨幣数量説を唱えていない。金や銀の貨幣に関しては、むしろ貨幣数量説とは対極に立つ必要流通手段量説を説いている。リカードウの変遷は労働価値論の形成によってもたらされたものと考えられる（奥山 [2013a, b]）。

ミルは、貨幣数量説を正しい学説として明確に指示している。確かに、ミルの相対価値論の需給論からすれば、貨幣数量説は、ミルの価値論が受け入れることができる理論である。しかし、ミルの価値の決定論は、生産費説を重視した理論である。ミルの貨幣数量説は、実際には、市場価格が自然価格から離れる限定された時期に適用される理論であり、また貨幣数量説は因果関係を示すというよりは恒等式的なものとして受け止められている。ミルは貨幣数量説を支持をしつつ、貨幣数量説の限界を説くことになる。本稿の考察に続くミルの貨幣数量説については、別の機会に論じたい。

注

- 1) ミルの相対価値論は、馬渡尚憲氏が指摘するように『原理』以前にも指摘されている（馬渡 [1997a, b]）。相対価値論は、早くはステュアート（James Steuart）の『ドイツ貨幣論』（1761）にも明言されており、1763年の「バリントン卿への手紙」にも明言されている（奥山 [2004]）。ステュアート

の『経済学原理』（1767）も、相対価値論を明言しつつ、生産費説的な価値論を同時に主張している。ベイリーに関しては、同じ論理を含む匿名著作 *Observations on certain verbal disputes in Pol. Econ. particularly relating to value and to demand and supply*, London, 1821. がベイリーの著作であった可能性もある。

参考文献

欧米文献

- Bailey, Samuel [1967], *A Critical Dissertation on the Nature, Measure and Causes of Value*, 1825, rpt. Augustus M. Kelley. 『リカード価値論の批判』、鈴木鴻一郎訳、日本評論社、1948。
[1837], *Money and its Vicissitudes in Value*, Effingham Wilson, London.
- Blaug, Mark [1985], *Economic Theory in Retrospect*, Cambridge University Press, 『経済理論の歴史 I —古典学派の展開』、久保芳和・真実一男訳、東洋経済新報社、1982。
[1995], Why is the quantity theory of money is the oldest surviving theory in economics, *Quantity Theory of Money*, Blaug, Mark, et al., Edward Elgar, Cheltenham, UK.
- Elitis, Walter [1995], John Locke, the Theory of Money and the Establishment of a Sound Currency, *The Quantity Theory of Money*, Blaug, Mark, et al.
- Fisher, Irving [1916], *The Purchasing Power of Money: Its Determination and Relation to Credit Interest and Crises*, The Macmillan Company, New York. 『貨幣の購買力』、金原・高木共訳、改造社、1936。
- Hollander, Samuel [1973], *The Economics of Adam Smith*, University of Toronto Press. 『アダム・スミスの経済学』、大野忠男訳、東洋経済新報社、1976。
[1979], *The Economics of David Ricardo*, University of Toronto Press. 『リカードウの経済学』、上、下、菱山泉、山下博訳、日本経済評

- 論社、1998。
- [1985], *Economics of John Stuart Mill*, Blackwell Publishers.
- [1987], *Classical Economics*, Basil Blackwell.
- 『古典派経済学』、千賀重義、服部正治、渡会勝義訳、多賀出版、1991。
- [1995], Ricardo—The New View, *Collected Essays I*, Routledge.
- Hume, David [1955], *Political Discourses*, 1752, *Writings on Economics*, ed. by Eugene Rotwein, University of Wisconsin Press. 『経済論集』、田中敏弘訳、東京大学出版会、1967。
- Laidler, David [1991], *The Golden Age of Quantity Theory of Money*, Harvester Wheatsheaf. 『貨幣数量説の黄金時代』、嶋村紘輝他訳、同文館、1991。
- Locke, John [1963], *Works of John Locke*, Vol. 5, 1823, rpt. Scientia Verlag Aalen.
- Some Considerations of the Consequences of the Lowering of Interest, and Raising the Value of Money, 1692. 『利子・貨幣論』、田中正司・竹本洋訳、東京大学出版会、1978。
- Further Considerations concerning Raising the Value of Money, 1695. 『利子・貨幣論』、同前。
- Two Treatises of Government, 1690, *Works of John Locke*, Vol. 5, 1823, rpt. Scientia Verlag Aalen. 『統治二論』加藤節訳、岩波文庫、2010。
- (Locke [1991], Locke on Money, W. Yolton, ed., Oxford University Press.)
- Malthus, Thomas Robert [2012], *Principles of Political Economy*, General Books. 『経済学原理』、小林時三郎訳、岩波文庫、上、下、1968。
- Marx, Karl [1971a], *Das Kapital*, *Marx-Engels Werke*, Dietz Verlag, Berlin, Bd. 23. 『資本論』、社会科学研究所監修、資本論翻訳委員会訳、新日本出版社、第1分冊、1982。
- [1971b], *Zur Kritik der Politischen Oeconomie*, *Marx-Engels Werke*, Bd. 13. 『経済学批判』、杉本俊朗訳、大月書店、国民文庫、1966。
- Mill, J. S. [1965], *Principles of Political Economy with Some of Their Applications to Social Philosophy*, 1st ed. 1848, 7th ed. 1871, *Collected Works*, Vol. 2, Vol. 3, University of Toronto Press. 『経済学原理』、末永茂喜訳、岩波書店、全5分冊、1959-1963。
- Ricardo, David [1951a], *On the Principles of Political Economy and Taxation*, *Works and Correspondence of David Ricardo*, ed., by Sraffer, Piero, Cambridge, University Press, Vol. 1. 『経済学および課税の原理』、『リカード全集』第1巻、末永茂喜監訳、雄松堂、1970。
- [1951b], Price of Gold, *Works and Correspondence of David Ricardo*, 1951, Vol. 3. 『金の価格』、『リカード全集』第3巻、同前、1970。
- [1951c], High Price Bullion, 1810, *Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. 3, 『地金の高い価格』、『リカード全集』、同前、1970。
- [1951d], Reply to Mr. Bosanquet's Practical Observations on the Report of the Bullion Committee 1811, *Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. 3. 『ボウズンキト氏の『地金委員会報告書に対する実際の観察』への回答』、『リカード全集』、同前、1970。
- [1951e], Notes on Bentham's Sur les Prix, *Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. 3. 『ベンタム「物価論」評注』、『リカード全集』、同前、1970。
- [1951f], Proposals for an Economical and Secure Currency 1816, *Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. 4. 『経済的でしかも安定的な通貨のための提案』、『リカード全集』第4巻、同前、1970。
- [1951g], Plan for the Establishment of a National Bank, *Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. 4. 『国立銀行設立試案』、『リカード全集』第4巻、同前、1970。
- Schumpeter, Joseph A. [1954], *History of Economic Analysis*, George Allen & Unwin, London, 『経済分析の歴史』全7巻、東畑精一訳、岩波書店、1955-1962。
- Smith, Adam [1981], *An Inquiry into the Nature*

- and Causes of the Wealth of Nations*, original edition, 1776, ed., by R. H. Campbell and A. S. Skinner, Liberty Fund, in Dianapolis. 『国富論』、水田洋監訳、岩波文庫、全4分冊、2001。
- [1978], *Lectures on Jurisprudence*, ed. by R. L. Meek, et al., Oxford University Press, rpt., ed., Liberty Fund. 『法学講義』水田洋訳、岩波文庫、2005。
- Steuart, James [1995], *Dissertation upon the Doctrine and Principles of Money applied to the German Coin*, 1761, in German; translated into English 1805, rpt., *Collected Works of James Steuart*, 7vols. Routsledge/ Thoemmes Press, vol.5)
- [1998], *An Inquiry into the Principles of Political Economy*, ed., by A. S. Skinner, 4 vols. Pickering&Chatto, London, 1998. Original published, 1767, *Collected Works of James Steuart*, 1805, 7vols. Routsledge/ Thoemmes Press, 1995. 小林昇監訳『経済の原理』、名古屋大学出版会、上巻（第1・2編）、1998、下巻（第3・4・5編）、1993。
- Turgot, Anne Robert Jacques [1972a], *Reflexion sur la formation et la distribution des richesses*, 1766, *OEuvres de Turgot*, Vol. 2, rpt., Verlag Detlev Auverman, 「富の分配と形成に関する省察」、『チュルゴ著作集』、津田内匠訳、岩波書店、1962。
- [1972b], *Value et Minaies*, 1769?, *OEuvres de Turgot*, Vol. 3, 「価値と貨幣」、『チュルゴ著作集』、同前。
- Viner, Jacob [1965], *Studies in the Theory of International Trade*, original edition 1937, rpt., Augustus M. Kelley. 『国際貿易の理論』、中澤進一訳、勁草書房、2010。
- Observations on certain verbal disputes in Pol. Econ. particularly relating to value and to demand and supply*, London, 1821.
- 奥山忠信 [1990]、『貨幣理論の形成と展開—価値形態論の理論史的考察』、社会評論社。
- [2004]、『ジェームズ・ステュアートの貨幣論草稿』、社会評論社。
- [2009]、『ジェームズ・ステュアートの貨幣数量説批判』、『埼玉学園大学紀要経営学部編』、第9号。
- [2010b]、『ロックの貨幣数量説』、『埼玉学園大学紀要経営学部編』、第10号。
- [2011a]、『市場における貨幣量の役割—David Humeの貨幣論』、奥山・張編『現代社会における企業と市場』、所収。
- [2011b]、『アダム・スミスと貨幣数量説』、『埼玉学園大学紀要経営学部編』、第11号。
- [2012b]、『貨幣数量説における交換方程式の考察』、『埼玉学園大学紀要経営学部編』、第12号。
- [2013a]、『リカードの貨幣数量説と国立銀行設立試案』、『政策科学学会年報』、第3号。
- [2013b]、『貨幣理論の現代的課題—国際通貨の現状と展望』、社会評論社。
- 奥山忠信・古谷豊 [2006]、『ジェームズ・ステュアート「経済学原理」草稿—第3編 貨幣と信用』、御茶の水書房。
- 佐藤有史 [2003]、『古典派貨幣理論—古い解釈と新しい解釈—』、『経済学史学会年報』、第44号。
- 清水敦 [1997]、『貨幣と経済』、昭和堂。
- 千賀重義 [1989]、『リカードウ政治経済学研究』、三嶺書房。
- 竹本洋 [1995]、『経済学大系の創成』、名古屋大学出版会。
- 時永淑 [1970]、『経済学史』、法政大学出版局。
- 中村廣治 [1996]、『リカードウ経済学研究』、九州大学出版会。
- [2009]、『リカードウ評伝』、昭和堂。
- 藤本正富 [1995]、『J. S.ミル相互需要説をめぐる諸問題—W.ソーントンと W.ヒューウエルの影響』、『経済学史学会年報』、第33号。
- [2001]、『J. S.ミル『経済学原理』第3版「国際価値論」新節の意味するもの』、大阪学院大学『経済論集』第15巻、第1号。
- 堀塚文吉 [1988]、『貨幣数量説の研究』、東洋経済新報社。

日本語文献

奥山忠信 [1990]、『貨幣理論の形成と展開—価値形

J.S.Millの価値論に関する一考察

馬渡尚憲 [1997a]、『経済学史』、有斐閣。

[1997b]、『J. S. ミルの経済学』、御茶の水書房。